

子どもは一日をどのよう暮らしているか

—東京中産階級の子どもの生活実態—



室谷幸吉

明彦は朝七時に起きて、ねるのは夜の九時半だ。その間の明彦の行動を追ってみよう。朝食を七時半から八時の間にとつて、後はあそぶ。九時からテレビを一時間見て、おひるまであそぶ。十二時に昼ごはん。終わってまたあそぶ。一時から三十分勉強をして、後あそび。三時から五時まで野球。六時から八時半の晩ごはんまでテレビを見る。九時におふろに入つて、ねるのが九時半ということになる。

人はみな、その人の能力の限界内で、その人の趣向に応じた生活を営む。どういう生活をりっぱであり、充実した生活と見るかは、その人その人の好みや考え方や信念によつてちがう。が、だれびとをも納得させうる、そして共感をよびおこすことのできる十分の気構えと身構えに支えられた生活でなくては、「いい生活」といえない。われわれ自身、りっぱな生活を追求してやまぬものであるが、子どもにも、同様な態度をもたせたいと強く希望するわけである。

われわれは、子どもたちに、彼自身の欲求や意思にもとづいて誠実

な態度で、行為を選別し、より出した生活を、時間によつて手ぎわよくワクづけていく知恵を与えたいと思う。つまり「きょうの午後はあるとこれをしたい。」「日曜には、午前中にあるとあれをして、午後は何時から何時まで、ああいうことをすることにしよう。」と、まだ来ない次ぎの時間の生活行動を予定させるのである。

こういう心組みを、満足に進めるためには、まず「何をするか。」「という行動内容が、子ども自身の要求にもとづいてつかまえられるばならない。つきには「何をするか」だけではなく「何のために。」という価値の尺度も加わるだろう。生活計画は、自身の生活を、意図的・能動的にとらえる力量なしには果されぬ作業である。それが、子どもらに、「実践を予想して、まじめに生活を組みたてると。」そして、「自分の考えたことを尊重し、同時に責任をもつこと。」のシケツに直結する。

という次第で、私は、小学校の一年生から「予定をもつた生活」をさせるための指導に相当の力を注いでいる。一例をあげて、もう

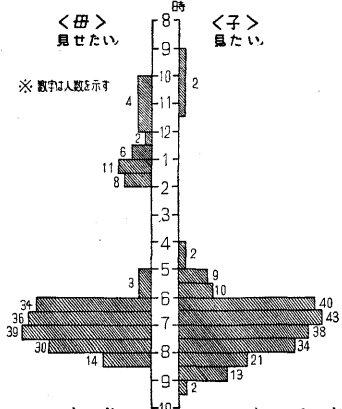
少し検討を加えよう。

ここにあげたのは、七——八才の男女児約八十名（いずれも東京の山の手に住む中産階級の子供）。両親の多くは高校・大学の教育をうけていて、教養はならして高い）についてのしらべである。子どもに次ぎの日曜の一日を「どのようにくらすか。」について考えさせ、『あすはこうする。』という生活時間計画表を渡し、それに計画をかきまとめさせた。

整理してみても、子どもの生活の主要な部分を、「睡眠・あそび・学習」の三つに分けうる事がわかった。これは予想の通りである。

主要な部分があつた。テレビである。ならしてみると、子どもは「毎日二時間半テレビを見たがっている。」ということである。十時間眠って、残り十四時間を一日の生活の営みに費している子どもが、その中の二時間半をテレビにさくということは、事の

第1表 テレビと子ども



当否はしばらくおいて、とにかく注目されねばならぬ現象である。以上の四つの部分の他に若干の軽作業がある。『花への水やり・庭そうじ・フロの水くみ・おつかい』などのお手伝

い、およびそれに類する行動である。その他は、生活を進めるための雑作業・雑行動——たとえば洗面・排便・着がえ・三度の食事・入浴——などである。

これによって見ると、子どもたちは決して勉強ギライではないのである。勉強をした方がいいし、またしなければならぬということとは十分に承知している。問題は、そういう「心の着実」さ以上に、魅力多い「遊び」の生活が、子どもらをさし招いているという点にある。「学習」と「遊び」と、この二つのものを並べ、自由採択にまかせた時「遊び」の方に傾くのが自然の情である。心身ともに健康な子どもならばそうなる。だが、子どもたちは、手放して「遊び」に傾いてはいない。彼らはいつも心の中に、遊びすぎはよくない、勉強も忘れてはならない——という制御的な心の働きを抱えている。これはオトナにしても子どもにしても、同じようなわけだ。子どもが「遊ぶ」ということは、決して「生活悪」ではなからう。遊ぶことは、子どもの成長に、必要不可欠な行動ではないか。そこで「遊び」の質が問題視されてくる。いかにして「賢く・よく遊ばせるか」である。小学校低学年でも、知的なものの注入を重視するよりは、よりよく遊ばせることに工夫を向けかえた方が、はるかに教育的だ。その方が、円満な人間・完全な人間・将来性のある人間をつくるのに、ずっと役立つようである。

子どもらに、自分の考えによってどうにでも自由に使える一日の生活のプランをたてさせると同時に、一方、同じ子どもらの母親たちに「自分の子どもにどのような生活をさせたいか」親側から希望の

スケジュールを同じ形式で書きこんでもらった。グラフの1・2・3表にあらわれた「母」の欄は、そうして出てきたものである。

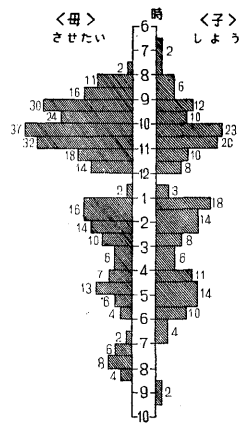
そこで、親の立場から描きあげられた子どもの生活像と、子ども自体の意向によって描きあげられた子ども自身の生活像とを重ねあわせてみる。ピッタリ重ね合うなら問題はない。そう調子よくいくものではない。そのズレこそ、子どもの欲しているものと、親の望んでいるものとの不一致をもの語る。

そこで、どうしてそのようなズレが生ずるか。ズレの何れがより正しいか。或いは、何れのズレを、どのようにしてうめあわせたらいいか。またはうめあわせる必要がないか——などを検討することによって、オトナの姿勢を正すといっしょに、子どもの姿勢の偏りをも正していくことができる。このグラフの中から、「子どもをどのように導くべきか」という緊要な教育課題を解決するための貴重なカギを発見することができよう。

第一表は、テレビと子どものむすびつきを、親子の両面から調べたものである。夕方の五時すぎになると、それまで遊びに夢中で姿も見せなかった子どもが、催促なしに、ヒョッコリ顔を見せる。とんで家に帰ってくる。どこで時計を見てくるのか実に正確に時間通りに帰ってくる——ということ、あの親の親からきく。テレビに対するこれほどの熱意を、同様に、予習や復習や作文や自然観察や、理科工作などにもつてくれるなら、子どもに関する学習指導上の悩みは、立ちどころに解消するのと思う。

子どもの半数以上が午後六時から七時にかけてテレビにかじりつ

第2表 こどもと勉強



いている。学校以外のどこかでこれほど多くの子どもが、しかも子どもの自発的意志によって同一行動をとるということは、かつてなかった。

しかも大多数の子どもは、この一時間の視聴だけでテレビから離れようとはしない。その後、尾を引いて八時までも九時までも、もっと遅くまでも見ようと意気こむ。このような子どもの強烈な志向を、無視し終えるものでないことを、母親たちも先刻ご承知で、ほとんどの母親は、六時から八時にかけての二時間の中で、或いは三十分、或いは一時間、または一時間半、二時間と、公然とテレビをみることを、子どもにゆるしている。だがその許容も八時までである。大目にみても午後八時半まで、それ以降見せてもいいと考えている母はひとりもない。そこで、この限界時間がくると、子どもと親の間で「見たい」「見せない」の言い争いがはじまる。このような、幾分かバカけてコッケイで、だがしかし真剣な家庭夜景に接することは決して珍しくはない。親が子どもにテレビ視聴をゆるす時間は、午後の六時から八時半にわたる二時間半に集中している。つきに第二の山を、数の上ではぐっと落ちるが、午後の一時から二時の間にみとめることができる。

第3表 親と子の生活計画
高木えつ子の場合

親	子
	6 ねる
	7 おきる あごごはん
起床 洗面 30分の 掃除	8 およぶ
	9 こどりのせわ
勉強	10 およぶ
食事	11 ぐおよぶ ひるごはん
食後テレビ を見る	12 さんごう
	1 さんごう
散歩	2 およぶ
おやつ	3 およぶ
遊ぶ	4 およぶ
自分の 掃除	5 およぶ
夕食の手伝	6 がきぎひく
テレビ 食事	7 テレビ ごはん
食後 話し	8
お風呂	9 ねる

そこで、親が子どもにテレビを見せたいと考えている時間が、昼型と晩型の二か所にあることがわかった。これを子どもの視聴志向とつき合わせてみると、母親のように昼型の意向をもつものは皆無に近い。これは、この時間に、午後六時以後ほどの魅力のある番組がないこと、疲れぬうちに、まず遊んでおこうという遊戯欲求の強さに因るものと思われる。子どもらの健康増進や運動機能の修練向上の観点から、むしろこの傾向は歓迎されていいではないか。

それに対して、午後五時以降の視聴意欲は、母親の許容度を上回る。子どもらの好むがままに視聴をゆるしておく、或いは目を悪くし、或いは刺激過剰で精神的障害を生じ、または過度視聴で睡眠不足を来たすなど、子どもらの心身の保全を全うしえない状況である。

望ましい取扱いの第一に考えたいのは、視聴と同時に、または視聴後に、子どもと話し合いの機会をもつことだ。第二には、何らかの形で、記録作業と視聴とを結びつけることだ。見ていてわかったこと・感じたこと・感動したことを書かせるのも一法だし、わからなかったこと・疑問の点を書かせるのもしく結構である。そうい

う作業を重ねることによって、またテレビの見方が一段と進歩するのである。

ことテレビに関しては「見たがる」子どもに対し、母親はだいたい「見せたくない」。それが「学習」となると事情は逆転する。即ち「学習」を「させたがる」親に対し、子どもは「したがる」ない。こ

うしたことは、私たちの身の回りで、日常何のフシギもなく頻発して、それだけに、ごくあたりまえのことと思われるであろうが、やはり注目を要する子どもの生活態度である。

子どものテレビへのかじりつきが、午後六時を境に急増していることから、当然の事として、次にあげる二つの点が注目される。

- 1、夕飯をたべながらテレビ視聴をつづける子が多くなった。
- 2、テレビを見終る時間が遅いので、スイッチを切ると同時に寝床に入る子が多い。テレビを見ながら眠りこんでしまう子もある。子どもの一日の生活がテレビで終りを告げるという新らしいタイプの出現である。

こういう「テレビ・エンド」の生活形式、それから食事とテレビ視聴との併用行為が、子どもらの健康保持や精神構造に、どのような影響を及ぼしつづけるか。子どもらの人格形成と、それらの関連が、検討考慮されねばならぬ段階に立ち到ったようである。

第二表は、子どもと学習の結びつきを親子双方の立場から語っている。親たちは平均二時間二十分の家学習を子どもらに要求して

第4表 平均計画時間

	ねる	学 習	テレビ	あそぶ	雑行動
母 親	10.5時	2.35時	1.92時	5.02時	4.21時
子	10.4	1.91	2.07	3.6	6.02

いる。この時間の中には、教科書以外の一般読書・日記をつける・ピアノや画塾に行つて絵を習う、そういうおけいこ事も加えられている(第四表)。それに対し子ども側の意向は一時間五十分余で親の希望を三十分ほど薄めた時間。この時間には、絵のおけいこ・手紙を書く・ピアノをひく、などの時間もふくまれている。一体、趣味でピアノをひいたり、好みの童話本や冒険小説を読むことなどを、学習と見るか、遊びとみるかは、はっきりと割り切れない。そして子どもたちには、このように「学習」か「遊び」か、判別しがたい行動が実に多い。幼児ほどの傾向が強い。

そこで、子どもらには、むしろそのような学習と遊戯の融合的活動を、推奨する方がいいのではないか。算数の筆算や、漢字の書き取り・文の視写のような、形のハッキリしたいわゆる宿題型の学習よりは、ずっと自然で生活的で、だから当然根本的で、それだけに効果の高い行動と考えていいのではないか。

二時間ほどの時間を、ひとまとめに使わせる方がいいと考えている親と、これをいくつかに分けて小刻みに勉強させる方がいいと考えている母親とがある。二者を比較して、いずれがよく、いずれが悪いときめられはしない。

約半数の母親は二分割型の学習法を望み、三割ほどが午前型の集中学習をさせたいと考えている。子どもの方は三割ほどが二分割型

学習を望んでいて、これが首位。次ぎは午後の集中型で二割強である。学習時間の設定については、このように親と子の間で、かなりの意見のズレがみられる。(明星学園)

日本保育学会第十三回大会予告

会期

五月二十八日(土) 午後一時～五時
二十九日(日) 午前九時～午後五時

会場

大阪樟蔭女子大学

プログラム

- (1) 研究発表
- (2) シンポジウム「年少児保育の諸問題」

参加申込み

- (1) 正会員は当方より御案内いたします。
- (2) 準会員は当日受け付けます。

連絡先

大阪府布施市菱屋西 大阪樟蔭女子大学内
日本保育学会第十三回大会準備委員会
(電話 大阪(72)二七七三番)